IV 浮世絵と柄鏡

Handheld Mirrors and Ukivoe Pictures

江戸庶民の絶大な人気を得た浮世絵には、しばしば柄 鏡が登場します。肌もあらわに鏡台の前で身支度を整え る女性や、楽屋で化粧する役者の姿など、鏡は憧れの美 男美女の「プライベートタイム」を演出するのに格好の 小道具でした。右の図のように、鏡に映る役者の上半身 を切り取って描いた人気シリーズもあり、人物画のフ レームとしても鏡が活用されていました。そもそも似顔 絵は「写し絵」とも言うため、鏡を用いた肖像画は遊び 心のある趣向であったのでしょう。左の図は、明治期に 活躍した浮世絵師・揚州周延(1838~1912)の代表作「真 美人」の一枚で、合わせ鏡を用いて襟足に白粉を塗る女 性を描いています。流行の品や風俗、珍しい文物を紹介 することは、メディアとしての機能を有する浮世絵の大 切な使命でもありました。浮世絵の小道具として好まれ た鏡というモチーフそのものが、まさに「時代を映す鏡」 であったのかもしれません。



揚州周延画「真美人」大判錦絵

明治30年11月

三代歌川豊国画 「今様押絵鏡 大原武松 (初代中村福助)」

安政7年2月



特別列品

Special Exhibit - MAKYŌ

魔鏡とは、鏡面に光を反射させると鏡背面もしくは内部に鋳込まれた図像 が写しだされる鏡で、唐代に編まれた『古鏡記』には、前漢時代の照明鏡が 「透光鏡」として記されています。日本では、幕末から明治期にかけて特に 多く製作され、明治7(1874)年開成学校の化学教師であったロバート・ア トキンソンが1877年5月に『Nature』に魔鏡現象に関する論文を投稿、国 内でもその奇異なる現象が注目されるようになりました。昭和初期に児童養 護施設エリザベス・サンダーホームの創設者である澤田美喜氏が十字架に架 けられたキリスト像の魔鏡を発見し、隠れキリシタン遺物として公開したも のが最も世に知られています。服部コレクションには、7面もの魔鏡が含ま れており、実際に鏡面から放たれる幻想的な画像は見る者を驚嘆させます。



↑投影された阿弥陀如来の姿

國學院大學博物館 Kokugakuin University Museum

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 [國學院大學渋谷キャンパス内] TEL: 03-5466-0359 WEB: http://museum.kokugakuin.ac.jp/

- Ⅰ開館時間 午前10時~午後6時(入館は午後5時30分まで)
- ■会期中休館日 2月22日(月)
- 【アクセス 【渋谷駅から】 ★ 渋谷駅から徒歩約13分
- - ᢍ 都営バス(渋谷駅東□バスターミナル54番のりば
 - 学03日赤医療センター行)「国学院大学前」下車
 - 【表参道駅から】 大 表参道駅(地下鉄半蔵門線・銀座線・千代田線)B1出口から徒歩約15分
 - 【恵比寿駅から】 🚶 恵比寿駅 (JR山手線・地下鉄日比谷線) から徒歩約15分
 - 歴 都営バス(恵比寿駅西□ロータリー1番のりば 学06日赤医療センター行)「東四丁目」下車

企画展 花鳥風月 柄鏡の美

~服部和彦氏寄贈コレクションを中心として~ 会期:平成28年2月11日(木・祝)~3月13日(日) 会場:國學院大學博物館 企画展示室

ミュージアムトーク

講師:內川隆志 (國學院大學 研究開発推進機構 教授) 平成28年**2月13日(土)** 3月5日(土) 14:00-14:30

Kachō Fūgetsu

The Beauty of Handheld Mirrors

-Focused on Kazuhiko Hattori Collections

Introduction

一画展

國學院大學博物館には、平成16(2004)年に服部和彦氏の篤志によって寄贈された899面もの和鏡が収蔵されて います。今回はこれらの収蔵品のうちから中世の終わり頃に出現し、江戸時代を通して一般庶民にまで広く浸透し た柄鏡の魅力をご紹介いたします。

古代、中世における和鏡の鏡背文様は、吉祥文としての松樹や竹などの植物に加え、鶴、雀などの鳥文を配置 するという一定のパターンから脱却することはありませんでしたが、江戸時代に花開く柄鏡の鏡背文様には、人物、 動植物、器物、山水楼閣をはじめ、自由奔放な独自の絵画的世界が採用され、私たちの目を楽しませてくれます。 味わい深い近世金属工芸の「粋」、柄鏡の世界をお楽しみください。

服部コレクションについて

Kazuhiko Hattori Collections

服部和彦氏は大正12(1923)年静岡県島田市に生まれ、幼少時代は横浜市で過ごされました。昭和17(1942)年、 19歳で早稲田大学を繰り上げ卒業した後は関東軍の砲兵学校に山砲兵として入隊、昭和20(1945)年には陸軍少尉 として従軍されました。シベリア抑留を経て、復員後、生まれ故郷の静岡県に戻って薬品の販売業に取り組み、 各地を歩きながら美術品の蒐集をはじめ、仏教考古学の泰斗、奈良国立博物館の石田茂作博士に師事することとな りました。

昭和45(1970)年には、石田博士の提案によって蒐集品の中から主眼である仏教美術のうち340点を博士が選出 し、服部氏が各資料に解説を添えた『和玄洞古玩図録』が上梓されたのです。また昭和52(1977)年には、それ らの資料を展示・保管する和玄洞集古館を静岡市に設立しました。

服部氏は、長年の厚生事業への貢献が評価され、昭和56(1981)年静岡県知事 感謝状が授与されたことをはじめ、同年厚生大臣表彰、昭和62(1987)年藍綬褒 章、平成元(1989)年シベリア拘留に対する慰労状ならびに銀杯、平成4(1992) 年静岡市教育委員会感謝状、平成7(1995)年勲五等瑞宝章が授与され、輝かし い功績を残しています。

平成16(2004)年には、服部氏の篤志によって仏教美術、考古資料等総数2,000 点もの膨大な美術品が本館に寄贈され、なかでも和鏡899面のうち、今回一部を 展示する522面もの柄鏡が含まれています。内容的には、柄鏡の出現期から終焉 までを網羅し、質、量共に国内有数のコレクションといえます。

蒔絵鏡筥/鏡台

19 世紀後半

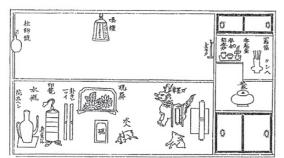
唐筥と「丸に四ツ菱」紋を金蒔絵で施す。鏡台の高さは82cmを計り 鏡筥には面径36cmの大型鏡を収め、合わせ鏡として用いられたもの であろう。



蛮衣装に身を包み、大きなパイプを 肩にかついだ人物が描かれる。

室町時代の終わり頃、円鏡が主流であった和鏡文化に柄鏡の出現というエポックな出来事がありました。足利義政に同朋衆として仕えた相阿弥が記した永正8 (1511)年の『君台観左右帳記』書院飾次第には、書院の柱に懸ける飾鏡の記述が認められ、『御飾記』には大永3 (1523)年の東山殿書院飾図には柱飾鏡の図が所載されています。柄鏡の出現年代と受容過程については諸説ありますが、大永5 (1525)年の紀年銘を有する愛知県熱田神宮伝来の花菱双鶴柄鏡が出現期に近い段階のものと捉えられています。

桃山時代の柄鏡は、大きく分けて長い柄に持送り式の 受け部を有する柄鏡と、持送りを持たない円鏡に長い柄 を接合した柄鏡の二種が知られています。



◆東山殿書院飾図



「丸に三つ柏」紋柄鏡

16 世紀後半(面径9.4cm 柄長11.6cm) 亀鈕の亀と飛遊する二羽の鶴が接嘴する 室町初期からの伝統的文様を踏襲する。 鈕下に「丸に三つ柏」紋が配置される。

Ⅱ 柄鏡の消長

Rise and Fall of Handheld Mirrors

江戸時代に入ると円鏡は重厚な作風のもの、界圏の無い絵画的文様構成をとるタイプとに分かれると同時に、その主流は柄鏡となってゆきます。特に江戸時代初期の柄鏡は鏡背面に残る鈕が外され、全体に動植物や人物などの素朴な絵画的文様が描かれるようになり、「天下一」「天下一作」等の銘に加え、「天下一若狭」「天下一但馬」「天下一佐渡」などの受領国名を刻んだ鏡工の名が出現します。作行きも総じて丁寧で、上質の白銅を用いている例が多くなります。



幕府は天和2(1682)年に「天下一」銘の禁令を発したことによってその使用が自粛されることとなりましたが、安永元(1772)年に再開されます。元禄の頃になると5寸以上の鏡が量産されるとともに10寸を越える大型鏡も登場し、踏み返しによる量産化が図られるようになります。鏡面の大型化につれ、鏡背文様にも人物・動植物・器物・家紋・幾何学的図様など多様なバラエティーが認められます。鏡背文様としては家紋や文字の入ったものなどが特徴的であり、絵画的文様も前期のものに比べ平坦な作風のものが多くなります。18世紀後半以降は、工芸品として精彩を欠くものが多くなり、その主たる鏡背文様は定型化した蓬萊文となっていきます。

年代的には「天下一」銘が使用禁止となる天和2(1682)年までを「前期」、天和2年から、「天下一」銘、受領国名の使用が解禁される安永元(1772)年までを「中期」、安永元年以降を「後期」としてとらえています。

←柄鏡の型式変遷

出現期の柄鏡は小型で円鏡に細い柄を接合した繊細な造作であったが、 時代が降るにつれて柄は短く大型化する。

Ⅲ 絵画的世界の展開

広がる海浜の表現が人物を一際引き

立たせている。

柄鏡の面白さは、何と言っても丸い鏡背に自由奔放に描かれる絵画的世界の展開です。自然を題材にした花鳥風月に加え、人物や器物など往時の情景や流行を今日に伝える絵画資料としても興味深い工芸品と言えます。特に江戸時代前期の画風は、狩野派、土佐派、琳派、四条派など多様な下絵に基づくものから朴訥な画風や浮世絵を彷彿とさせるものまで、あらゆるものが取り入れられました。ここでは、江戸時代前期から後期に至る柄鏡を画材で分けて展示しています。その

大きさや金質の差、文様表現の違いなどを見比べてみてください。

鏡背意匠には、日本や中国の故事、神話、伝説、寓話、戦記、武勇伝などに加えて風俗画や風刺画、農耕、漁労の場面など多岐にわたる人物画題や、牛や馬といった人々の生活に身近にあった家畜などをはじめとして、自然界に生息する猿や鹿、栗鼠、兔、虎といった動物や鯉などの魚類が画材として取材されています。空想上の動物として龍や悪夢を食べる獏、麒麟、唐獅子なども比較的多い画材と言えます。鳥類画材には、和鏡からの伝統を引き継ぐ鶴、雀、鴛鴦などの他に、鷺、鷹、雉、鵲、鶉、翡翠、雁、鴨、燕、孔雀などが知られており、想像上の鳥類とも言える鳳凰なども多く採用されている画材の一つです。

和鏡の伝統とも言える植物画材はもっとも多く、その数は数百種類に及び、なかでも吉祥文様の代表とも言える松竹梅 や秋草や菊や牡丹などの花、栽培植物である栗、葡萄、稲などが多く見られます。その他、富士山や近江八景、山水を描 いた風景画材や楼閣などの建造物、宝尽しや水車、扇などの器物などの画題も採用されています。また、江戸時代中期以 降に流行する「高砂」「南天」などの文字を鋳込んだ文字入り鏡や、家紋などの図案を採用した柄鏡も多数知られています。

